

## 国立民族学博物館研究報告別冊 no.014; 緒言

著者	竹村 卓二
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	014
ページ	i-iii
発行年	1991-03-29
その他のタイトル	Preface
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/3568">http://hdl.handle.net/10502/3568</a>

# 緒 言

竹 村 卓 二\*

ここに「漢族と隣接諸族——民族のアイデンティティの諸動態——」と題して上梓した『国立民族学博物館研究報告別冊』第14号は、昭和62年度より平成元年度にいたる3年次にわたって実施した〈国立民族学博物館共同研究〉「漢族の地域性とアイデンティティ——中国南部を中心とした整理と分析——」（研究代表者：竹村卓二）の研究成果報告書である。

統一的な多民族国家を標榜する中国は、漢族と公称55種の少数民族とから成り立っている。そのうち国家構成の主体をなすのは、いうまでもなく総人口の94パーセントを占める漢族であって、その総数は10億を超えるといわれている。しかも漢族は、中国本土のほかに台湾・香港、さらには海外各地に広く分布しており、仮にこれを単一の民族と認めるならば、漢族は世界最大のエスニック・グループということになる。

しかも我々日本民族にとって、漢族は古くから有形無形に密接な関係を保ってきた最も身近な隣人であった。それにもかかわらず従来わが国においては、漢族研究は必ずしも活発とはいいがたかった。なるほどわが国は、古来多くの文物や思想を中国から摂取してきたし、一時期“学問”といえば、それは即、中国の学問のことであった。だがその場合の学問とは、知識層や支配層が教養ないしは経世の手段として修得に努めた儒教が主流をなしていた。このような学問的風土のもとでは、数千年にわたって中国の大地で日々生活を営んできた漢族《常民》の信仰、祭祀、生業、その他の習俗一般といった、地域に根ざした民俗文化に対する学問的関心は、きわめて低調なまま推移せざるをえなかった。すなわち一時代以前のわが国のシノロジーにおいて、《中国文明》の研究は活況を呈したが、《漢族文化》のそれは停滞を余儀なくされたゆえんである。

もちろん我々は、その間にわが国の社会学者や歴史学者が中国の一部の地域において、当時としてはかなり大規模なコミュニティ・スタディを実施し、それ相当の実績を挙げたことを知っている。しかしながら、大勢としては15年戦争、さらにはその後の中国の不安定な状況などに阻まれて、少なくとも中国本土の漢族に関する研究は、

---

\* 国立民族学博物館第一研究部

ほとんど停滞したまま今日に及んだというのがわが国学界の過去の実態であった。

このような、いわば逼塞状態に転機をもたらしたのは、いうまでもなく日中国交回復から文化大革命を経て四人組失脚にいたる、一連の客観情勢の変化であった。とりわけ文革終息後に中国側が採った対外的開放政策は、わが国各分野の研究者に対して中国訪問の機運を大いに促した。漢族研究の分野でも、まだ諸種の制約をともなっているものの、いずれ近い将来にわが国の研究者が、現地で本格的な調査研究に従事する日が到来することは疑いをいれざるところであろう。

その上、この際見逃せないのは、こうした動向と符節を合するかのようにより、これまで台湾、香港その他の外地で、多年地道なフィールド・ワークを続けてきた中堅ないし若手の漢族研究者の努力が、ここにきてさまざまな形で結実しはじめたことである。しかもこうした研究者の多くは、これまでいわゆる《外地中国》(Residual China)において蓄積した豊かな経験と実績とを生かして、今すぐにでも中国本土で本格的な漢族研究に着手しうる態勢を十分に整えているといつてよい。このような背景のもとに、標題のような漢族研究のプロジェクトを企画したことは、甚だ時宜を得た着想であったと、我々は自負している。

ところでこのプロジェクトの最大の特徴は、漢族研究者と少数民族研究者が、緊密な協同のもとに、所与の課題に取り組んだことであろう。その場合我々は、次の2つの基本的な視座を共通の方法論的前提として研究を実施した。第1は、従来のシノロジーにおいては、とかく中国文明を一元的にとらえる傾きがあったのに対して、我々は実際に漢族が形成する社会や文化は、地域や環境によってきわめて変差に富んでいる事実を思いを致し、互いに自他の識別意識をもつ漢族各《民系》を、それぞれ広義の《漢族》エスニシティを構成するサブカテゴリーの1つとみなして、多元的に扱ったことである。その意図するところは、こうした見方に立つことによって、各サブカテゴリーを通底する漢族文化の普遍的要素が浮かび上がると同時に、従来必ずしも十分に説明されなかった漢族内部の多岐性ないしは多様性を分析するための、1つの手掛かりが得られると考えたからにほかならない。

第2の視座は、漢族と少数民族との関係のさまざまな位相の分析を通じて、そこから漢族の社会や文化の特質を抽出しようとするアプローチである。中国において漢族と少数民族とは、どの地域でも互いに隣接して生活を営み、互いにさまざまな刺戟を与えあっているにもかかわらず、従来漢族研究者と少数民族研究者とのあいだの連携や情報交換は必ずしも緊密とはいえなかった。そこでこの共同研究では、少数民族研究者の側から提供された漢族と少数民族との《境界》や少数民族の《漢化》(sinicization)

に関する分析結果を素材として共同討議を重ね、その面からも漢族の特質を浮き彫りにする方法を採った次第である。いうならば、第1の視座は漢族をポジ画像として、第2の視座はネガ画像として捉えようとする試みである。つまり、《陰》《陽》両画像を照合することによって、「漢族とは何か」という究極の課題に対して、この共同研究が新たな展望を開く一端緒になりえたとするならば、我々の当面の目標は達せられたといえよう。

以上のような基本的視座を共通の立脚点として、我々はこの3年間不断に意見を交換し、議論を積み重ねてきた。そしてその成果を以下に収録した12編の論考に集約して世に問う運びになった。もとより漢族研究の前途は遠遠である。我々はこのプロジェクトに参画したすべての同学諸氏とともに、本論集が現段階におけるわが国の漢族研究の1つの通過点を画すると同時に、将来のこの分野の飛躍的發展への一里程碑になることを願って、今後とも研鑽を続けていく所存である。

なおこの際特に付言しておきたいことは、3年間にわたるこの共同研究が成功裡に運営され、所期の目的を達成しえた背景には、本論集の寄稿者のほかにも数名の共同研究員および共同研究特別協力者の有形無形の貢献があったことである。その経緯については巻末「あとがき」に譲るとして、終始熱心に討論に参加し、数々の建設的な意見や提言を寄せられた各位に、この場を借りて深甚なる謝意を表すものである。また本論集の編集に当たっては、合衆国ブランダイス大学のバーバラ・ボールズ・スワン博士 (Dr. Barbara Bowles Swann) の特段のご協力を賜わった。同博士のご好意に対しても心からお礼を申し上げたい。

## 付記

この論集に収録した12篇の論文の一部には、文末にコメント（および場合によってはリプライ）を掲載した。これらは当該論文をめぐって、共同研究員相互のあいだで取り交わされた討論の中から、編者が特に再録するのが適当と判断したものである。